

島根の中山間地から Work as Life

第12回

「衣食足りず、礼節を忘れる」

野中 浩一

1. 「高齢者 926 万人」の支えがなくなる日

中国春秋時代の政治家、管仲かんちゆうは「倉廩実そうりんみつれば則ち礼節を知り、衣食足れば則ち栄辱を知る」との言葉を遺している。日本では「衣食足りて礼節を知る」として知られた言葉である。

これまでの日本では、寒さをしのぐ手段をもち、飢えや渴きを満たす手段があり、およびそれらが後々も続くであろうという見通しがもてていた。2009年以降、日本の人口が減少に転じてから15年が経った。図1のとおり、生産年齢人口が減っている一方で労働力人口は増えている。その理由は、女性と高齢者の労働参加である。つまり70歳前後の世代が多く勤労していることが、人口が減り続けている日本において暖かな生活と食料が保障される、大きな支えになっているのである。ちなみに2021年の労働力人口は6,907万人、うち65歳以上は13.4%で926万人である。

同時に、今後これらの世代が労働市場や社会生活からリタイアする中で、今まで当たり前前に受益していたものが、この数年で急速に失われる可能性が考えられる。特に高齢就業者の割合が多い「農林業」、食や住に直結する「運送業」や「土木建築業」では既に影響が出始めている。さらに今後は、「運輸交通業」、「電気・ガス・熱供給・水道業」といった生活インフラにも今以上の影響が出ると懸念している。言うまでもなく、これらの分野以外にも、医療、福祉、教育、宿泊、製造など、どの分野も人が不足している。

一方で、ここ最近の日本の産業界を見るに、そうした人手不足の中だからこそ、業務の量や質を簡単には減らすことができない苦しさが充満するように思う。人が充足していた時代の流れを引き継ぐ中で、管理者・労働者ともに業務量や業務時間が過剰になりやすい状況があるのではないだろうか。できないこ

とが増える中でも無理せざるをえず、疲労とストレスが溜まり、仕事上のミスやトラブルや事故が発生しやすくなっているように感じている。

こうした人手不足に端を発した現代日本の課題が解消に向かわない理由は、戦後の日本が処理してきた課題と違うからであると考えられる。何が違うかと言えば、①中央による上意下達の法律や予算だけでは解決しない点、反対に、②近視眼的な制度や規制がさらなる混乱や歪みを生む点が違うのである。加えて歴史を顧みるに、困窮する順番は「地方」や「(人・もの・金・情報の)資源が手薄なところ」からであり、③その対策をする側の中央の政治家や官僚はその多くが都市に居住しており、人・もの・金・情報の資源が比較的豊かであるため、地方困窮の危機感が(頭では分かっている)わが身に沁みにくいいため、これまでの政策の発想の延長線上でしか対策ができない点も課題へのアプローチを難しくしているのではないだろうか。(※1)。

コロナ禍のときにマスクや体温計が高騰し買いにくくなったケースとは違い、前述したような農林業や運送業、土木建築業や運輸交通業の影響は、短期間で改善されることはない。むしろ年月が経つほど深刻化するものが多いだろう。個人個人の危機感の蓄積に物価の高騰や大震災などが重なった時、風評による集団パニックや集団暴力を呼ぶ恐れもあると懸念している。

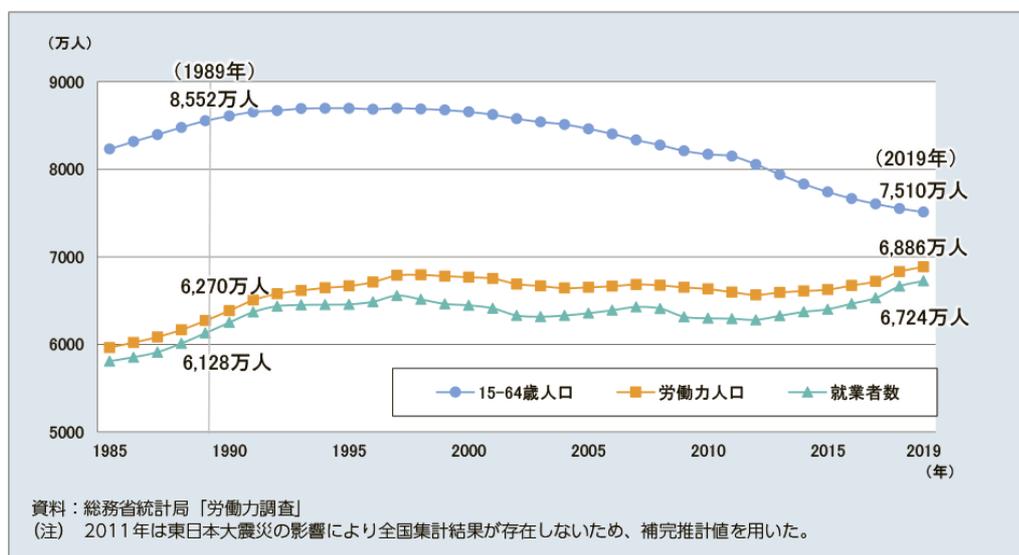


図1 労働力人口・就業者数の推移

(出典：厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-03-03.html>)

2. 労働の中核世代が「10年で600万人」いなくなった国

世界では、産業革命が始まった1750年に人口が7.3億人であった。その後1850年に12.6億人、1950年に25億人になり、1990年には53億人、2024年現在は80億人を超えている。

興味湧き、中沢新一著『100分de名著 野生の思考 レヴィ=ストロース』を読んだ。人類学は門外漢であるが、今の社会に繋がる道筋が示されていると感じられた。曰く、エントロピー（※2）の低い社会では「構造が循環的に作動することができる」が、対してエントロピーが増大していき秩序が解体してくると「構造がうまく機能しなくなる」とのことである。こうした社会の変化の原因の1つとして、レヴィ・ストロースは「人口増大」を挙げている。人口が増えすぎると構造に収めることが難しくなるというのである。地域社会や学校や家庭が解体している現代日本、無秩序で複雑な方向に向かっているグローバル化した世界、変えることも戻すこともできないのは、このあたりにも理由があるのかもしれない。

視点を日本に戻すと、言うまでもなく、世界に先駆けて日本は高齢化と人口減少が進行し続けている。表1は1920年以降の出生数と死亡数、それらを差し引いた自然増減数を表している。日本の総人口は2008年（平成20年）の1億2808万人がピークであり、2024年（令和6年）2月1日時点の概算値は1億2399万人である。また、労働の中核をなす15～64歳人口は1995年（平成7年）の8,726万人をピークに、2012年（平成24年）10月1日時点で8,017万人、2022年（令和4年）10月1日時点で7,420万人である。27年間で1,306万人減、この10年間だけでも597万人減となっている。

この人口減少という現象をどう捉えるかは判断が分かれるところである。養老孟司は『日本の歪み』の中で、「少子高齢化は一種の自然現象だから、素直に受け止めたらいいいも悪いもないはず」「なんとかしようとするのがおかしいのではないか」との視点を提示している。また、この著書の冒頭で「どこかに正しさがあるという思い込みこそ、『近代日本社会の歪み』そのものだったのかもしれない」とも述べている。

表1 出生数、死亡数、自然増減数

年	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年
	大正9年	昭和5年	昭和15年	昭和25年	昭和35年	昭和45年	昭和55年
出生数	2,025,564	2,085,101	2,115,867	2,337,507	1,606,041	1,934,239	1,576,889
死亡数	1,422,096	1,170,867	1,186,595	904,876	706,599	712,962	722,801
自然増減数	603,468	914,234	929,272	1,432,631	899,442	1,221,277	854,088

年	1990年	2000年	2010年	2020年	2021年	2022年
	平成2年	平成12年	平成22年	令和2年	令和3年	令和4年
出生数	1,221,585	1,190,547	1,071,305	840,835	811,622	770,759
死亡数	820,305	961,653	1,197,014	1,372,755	1,439,856	1,569,050
自然増減数	401,280	228,894	-125,709	-531,920	-628,234	-798,291

(出典：e-Stat 人口統計調査 <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411561>)

(出典：環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/>)

3. 解体

ここ最近、私の周りで「離婚」に関する話を聞くことが増えた。1件や2件ではない。また同時に、会社から「人が大勢辞めていく」話をいくつも聞いている。たまたまかもしれないが、そうでない気もしている。安易に結びつけるのは怖いようにも思うが、前述したような時代と社会の変化の中で個人への負荷が増すと、家庭や会社組織でもその負荷がぶつかり、はじけることがある。蓄積されたストレスがぶつかり、いさかいや混乱が増加しているように感じている。

国は予算(金)と法律(制度)でものごとを変えようと試みる。しかし家庭や小さな会社などの課題には、制度を重ねるほどに不要な負荷をもたらし、構造の解体を促してしまう難しさがある。家庭や地域、小さな会社などエンтроピーが低い社会を活性化するうえで大事なことは、①自由度を高め、②当事者目線で不足を支援し、③(家庭であれ組織であれ)運営し続けられる見通しを担保することではないだろうか。17年間の経営者としての経験から、そのように感じている。

4. 不安と緊張の中で、相互理解は成立するか

人は、ときに非合理的な選択をしてしまうことで知られている。他者に^{おもね}阿るような意思決定をしたり、^{ごびょう}誤謬を犯してしまったり、自身を律することができなかつたり、経験的・感情的になって合理性を欠き、判断を誤ってしまったりすることがある。このような人間の情報処理については、直感型のシステムと熟慮型のシステムの二重過程理論で説明されることがある(※3)。こうして必ずしも合理的ではられない

人間は、良し悪しに関わらず、他者や集団に同調したり、目先の利益や欲に牽引されたり、感情の揺れや葛藤の中で、自己や他者を抑圧することがある。

人間の中には「正しさ」があると幻想したくなるが、実際には安定を求めながらも「揺らぎ」の中で生きている。この人の中にある揺らぎの振幅は、社会（世界や自国や環世界や身近な他者）の安定・不安定と繋がっている。では、秩序が解体され混乱が生じている「非常時」に、人と人とは、特に対立する人や集団が「理解し合うこと」は可能だろうか。

平成の時代のように、多くの中流階級に人・もの・金・情報が行き届き、心身・経済ともに余裕がある場合、お互いが理解し合えないまでも、譲歩による妥結は難しいことではないだろう。多くの人が絶望や孤独や無力から守られていて、地域社会の日常に良い循環が巡っていることは大きな支えになり、人と人とは諍いを避けて融和を目指す方向に向きやすいと考えられる。

一方で、生活や仕事での先行き不安がある中、人手不足の影響から介護や育児のアウトソーシングが難しくなり、仕事も人が足りず繁忙し、家庭と仕事の両立が難しくなった場合を想像してみたい。強い疲労感、先行きが見えない不安感、不眠と動悸の中、人と人とは穏やかに会話することは難しいだろう。このように日常が非日常に変わり、その非日常が日常に置き換わったとき、人と人、もしくは国と国とは、対話もままならない中で、どう理解し合えるのだろうか。

ストレスと判断の関係について、ターリ・シャーロット（2019）は「ストレスを受けると、私たちは危険感知に固執するようになり、うまくいかない可能性に目を向ける。それによって極度に悲観的な見解が生まれ、結果として過度に保守的になってしまう」と述べている。一方で、恐怖心や危機感を和らげるような材料を得ることによって、「自分の心の状態を意識的に変えて、本能的なパターンを打開することができる」とも述べている。

こうした保守的かつ過敏な状況の中で、人が人を受け入れ、建設的な方向に向けて動くために必要なことは何だろうか。同じくターリ・シャーロットの著書から言葉を借りると、人は自分の先入観に反することは受け入れ難いことから、まず「意見の食い違いよりも共通点に注目すること」が大事であると言う。そして効果的に伝えるために「気持ちを共有すること」、加えて行動を導くうえで、肯定的なフィードバックなど「即座の快楽やポジティブな期待感があること」、さらに主体性に基づく選択肢があるなど、「自分が関与したという適度なコントロール感の認識があること」が必要となる。人には、重要だが不愉快な情報は避ける傾向があるため、「相手が知りたがっていることに即した、ポジティブな観点から伝えるこ

と」も大切なことである。以上のように、人は基本的に自分の信念を重視し、快樂へ向かって進み、苦痛から遠ざかろうとする。

5. ネガティブの川から、ポジティブの砂金を拾う

高度に専門化した日本の社会は、「木を見て森を見ず」の状態にある。複雑化した社会だからこそ、全体を俯瞰して見るのが大切であると感じている。また、目に見える希望や分かりやすい打開策など、ビッグポジティブに一喜一憂しないことが、道を踏み外さないためのコツであると考えている。臥薪嘗胆の構え、目の前を覆う無数のネガティブを選り分けながら、その濁流の中から1粒の砂金（小さなポジティブの種）を見つける感覚が、今後の四半世紀を見据えた場合に大切ではないかと想像している。

また、人口減少下で起こりうる非常時を支えるうえで、集団の力、特に地域や家族など、身近な社会が機能することが、言わずもがな必要であると考えている。今後20年、人口減少が深まるほどに発生するだろう課題と、それに付随して発生する「絶望感、孤独感、無力感」に対して、そこに生きる人と人とがどのように集い、「明日への希望と、寄り添い合う関係と、今できることがある実感」がもてる集団を創造していけるかが、心理と教育に携わる私の関心である。私も含めた日本人の多くが、「衣食足りず、礼節を忘れる」ということにならないように。

今回の文章では、かなり大風呂敷の空理空論を広げたように思う。今回を経て次回以降は、タイトルのとおり、島根の田舎、私にとって身近な地域を舞台として論を展開する新シリーズを開始し、地域の人や家族の変化に焦点を当てていく予定である。そうした目に見えて触れることができる身近な世界を通じて、個人の手には負えない大きな変化に対して、1人1人のウェルビーイングに向けた、小さく着実な「今ここ」の取り組みを発信していきたい。

注釈

※1 この点は、失礼な決めつけであるかもしれない。ヒューリスティックな危機感に基づく庶民感覚と、分析的な思考でものごとの対処をする（庶民感覚への理解が疎かになった）俗にいう上級国民感覚と、その乖離が大きくなり、意図せず対立が生じることを危惧している。

※2 エントロピー：本文においては、人間社会における乱雑さや不確かさの意。

※3 二重過程理論には批判もあり、議論の最中である。

引用・参考文献

- 金子充 (2014) 『二重過程理論』日本マーケティングジャーナル Vol.33 No.3 pp163-175
- 中沢新一著 (2016) 『100分 de 名著 野生の思考 レヴィ=ストロース』NHK 出版
- 高橋昌一郎 (2012) 『感性の限界 不合理性・不自由性・不条理性』講談社
- ターリ・シャーロット著 上原直子訳 (2019) 『事実はなぜ人の意見を変えられないのか』白揚社
- 養老孟子 茂木健一郎 東浩紀 (2023) 『日本の歪み』講談社
- 第一生命経済研レポート 2020.10 (https://www.dlri.co.jp/pdf/dlri/04-20/2010_b.pdf)